

L'Echange

La Société Franco-Japonaise des Techniques Industrielles 日仏工業技術会

L'Echange は、特に次世代を担う若い技術者・関係者に向け、日仏工業技術の

FREEPAPER 第4号 2016年1月発行

交流・普及を促進することを目的としたフリーペーパーです。

巻頭特集：建築家・坂 茂氏
都市：Nuit Blanche
文化：パリ留学中に見た日本
食：めくるめく牡蠣の世界

Special

Urban

Culture

Cuisine

L' Echange

巻頭
特集

第 4 号

建築家・坂 茂氏インタビュー Architecte Shigeru Ban

建築デザインと災害支援プロジェクト



建築家・坂 茂氏

2014年に、建築界のノーベル賞と言われるプリツカー賞を受賞した建築家・坂 茂氏。今回の巻頭特集では、坂氏に建築活動の原点からデザイン理念、そして災害支援プロジェクトへの思いに至るまでを伺いました。

— ご経歴と建築体験の原点について教えてください。

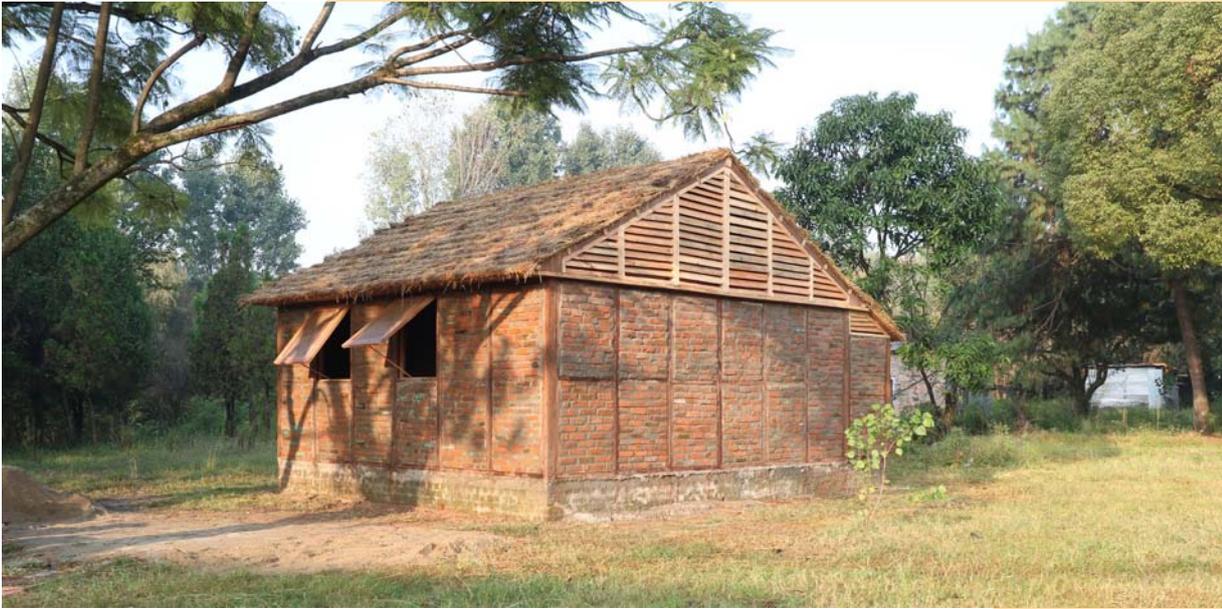
小さい頃に家の増改築で大工さんが入っていて、彼らの仕事に憧れたのが建築体験の原点です。当時は大工さんが建築をつくって思っていました。中学生くらいのときに建築家という職業を知り、将来建築家になろうと決めました。

体験として私の感覚に初めて訴えた建築は、オリンピックに向けて建設された丹下健三氏の国立代々木競技場です。中学生の頃に初めて意識して、建築として構造美みたいなものがありました。

アメリカ留学時代、初めはロサンゼルス南カリフォルニア建築大学にいました。その時に、ノイトラやシンドラーのケース・スタディ・ハウスが好きで、影響を受けました。ケース・スタディ・ハウスは、「ケース・スタディ」と呼んでいるように非常に実験的です。その実験的であるということには、ふた通りの意味があります。一つは、材料や工法の使い方で、もう一つは空間的な試みです。工法的には、床でコンクリートを立ち上げてパネル状にするなどの新しい提案がされました。それから、イームズが行ったように、工業製品として作られたものが積極的に建築に取り入れられました。空間的な試みとしては、ある意味で日本的な影響をすごく受けています。カリフォルニアの気候も手伝って、内外の空間の連続があります。それは視覚的でもありますが、立体的にもそうです。ですから、私はケース・スタディ・ハウスを通じて、間接的に日本の建築の影響を受けていると思っています。それから、私の先生でもあるレイモンド・キャビーの自邸もとても影響があったと思います。



Nicolas G Hayek Center
(c): Hiroyuki Hirai



ネパールプロジェクト
(c)Shigeru Ban Architects

その後、ロサンゼルスからニューヨークのクーパー・ユニオンに移りました。クーパー・ユニオンでは教育の内容が全く違いました。クーパー・ユニオンの先生であったジョン・ヘイダックの影響が大きいと思います。ジョン・ヘイダックは、ル・コルビュジェやミース・ファン・デル・ローエといったような建築家に代表されるインターナショナルスタイルをとっています。インターナショナルスタイルは、日本語では国際建築様式と呼ばれています。カリフォルニアの建築が地域に根ざした建築であったのに対して、インターナショナルスタイルは、地域性に関係なく、どこにおいてもコンテキストを意識せずに、白い壁、ガラス、鉄といった近代的な素材で合理的な箱をつくっていきます。ヘイダックはそれに大きな影響を受けた建築家で、大学もそのような方向性でした。だから、その対極であるフィンランドのアルヴァ・アールトは全く教育の対象に上りませんでした。しかし、アールトには卒業後影響を受け、インターナショナルスタイルからそちらの方に大きくシフトチェンジした経緯があります。

被災地支援のためのボランティア組織であるVAN（ボランタリー・アーキテクト・ネットワーク）プロジェクトでは両方を組み合わせています。やはり、基本的な工法がないと量産して展開するのが難しいです。しかし、ローコストな仮設住宅でも、気候的な条件や現地で手に入る素材といった地域性を考えることは重要だと思っています。

— 坂先生の建築のデザイン理念について教えてください。

プロブレムソルビングだと思います。プロジェクトごとに土地や予算など色々な問題がありますが、それをデザインで解決していくことが基本だと思っています。

例えば、スウォッチ・グループ・ジャパンの本社である、銀座のニコラス・G・ハイエクセンターの国際コンペでは、スウォッチが所有する7つのブランドのブティックが求められました。しかし、私が問題と思ったのは、間口が狭かったことです。銀座通りに面して1つのブティックを設けてしまうと、残りの店舗が裏や上階などになってしまい、商業環境が大きく変わってしまいます。当然、銀座通りに面している店舗には人が入りやすく、他の階や裏の店舗には人が入りにくくなってしまいます。土地の形がそうだったので、施主はしょうがないと考えていたようでした。しかし、私はどうやったら7つの店舗全てに、お客さんが入りやすい同じアプローチ条件を与えられるか、をデザインテーマにしました。そこで、1階に7つのブティックそれぞれのショールームを配し、それ自体がエレベーターである各ショールームが、人々を各ブティックへ直接案内するという、全ての店舗が同等のアプローチを得ることができる仕掛けをつくりました。それが認められて、コンペに勝って建設されることができました。このように、間口が狭いという特性をデザインに生かしました。また、銀座は裏通りに入るといろんな店が顔を出していますが、そういった情景もパッセージに生み出しました。



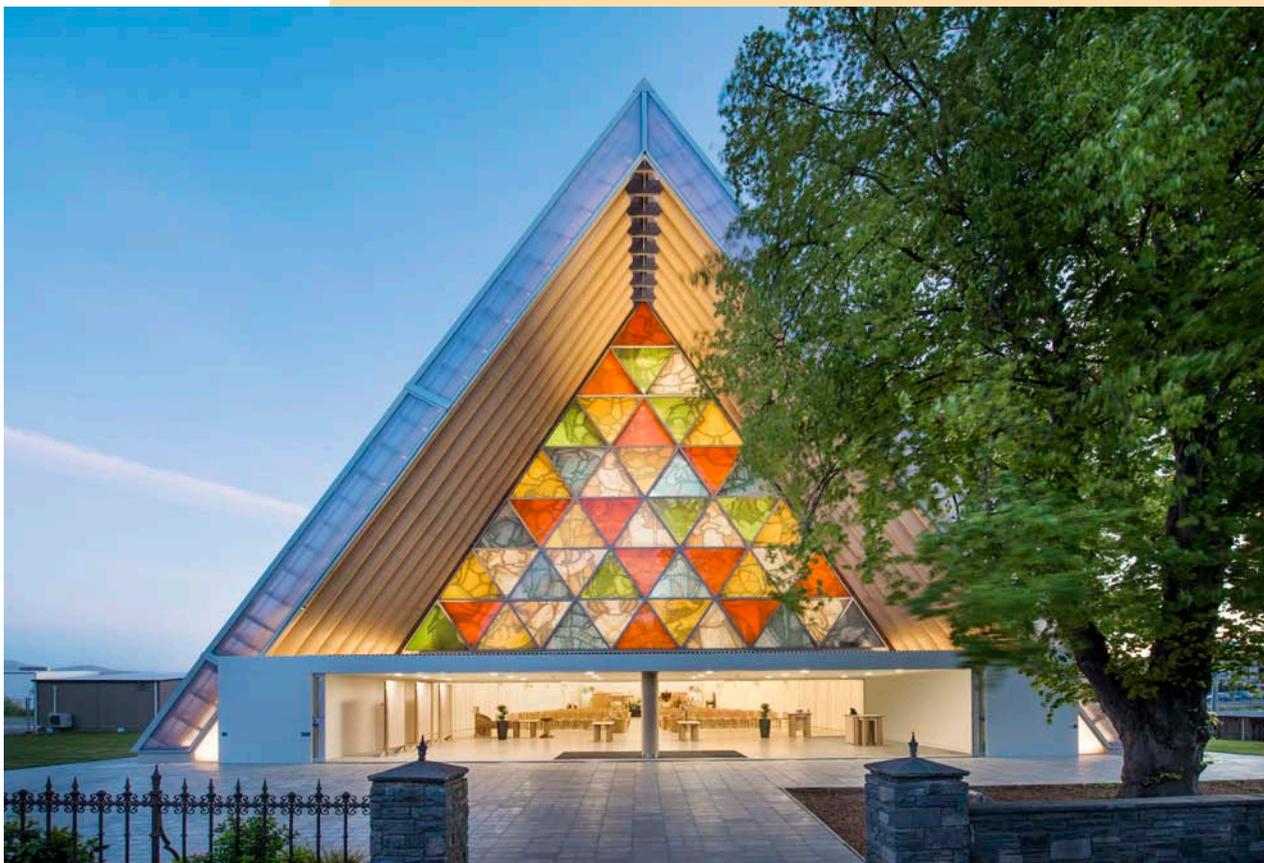
右上・右下：
ネパールプロジェクト
(c)Shigeru Ban Architects
左上：
Nicolas G Hayek Center
(c): Hiroyuki Hirai
左下：
紙の橋
(c)Didier Boy de la Tour

— 昨年建築のノーベル賞と言われるプリツカー賞を受賞されましたが、受賞されたお気持ちをお聞かせください。

いただいた当初は早すぎると思っていました。なぜなら、審査員を担当したこともありまして、過去に自分が尊敬する建築家が晩年に賞を貰っていたからです。だから、僕はまだ賞に値しないというのが最初の印象です。しかし、受賞理由を聞いたら、ただ建築作品を作るだけではなくて、災害支援と両立させながら建築を作っているからとのことでした。プリツカー賞が有名な建築家に順番に賞を与えるのではなくて、何か社会的なメッセージを与えたいということでしたので、納得いたしました。このように、当初は納得できていませんでしたが、いただいて良かったと思っていることは、20年間ずっと災害支援のボランティアをしてきて、そういう方向での活動のお墨付きがいただけた気持ちが生まれたということです。自分の信じる道を突き進んで良いのだという余裕ができました。

セガン島 シテ・ミュージカル
(c)Shigeru Ban Architects Europe-Jean de Gastines Architectes-





— 災害 支援プロジェクトへの思いとその原点について教えてください。

紙の大聖堂
(c)Stephen Goodenough

地震などの自然災害でも、地震そのもので人が亡くなるのではなく、建築が崩れて人がなくなります。つまり、間接的には建築家の責任です。しかし、建築家はそのような災害後の仮設住宅の設計はしていません。なぜかという、歴史的に見ても、我々の仕事のほとんどは特権階級のための仕事で、彼らの財力や政治力を使って作った立派な建築を世間に見せることだからです。それは、現代でも余り変わっていません。災害で家を失った人の仮設住宅は、私たちの仕事には入っていませんでした。しかし、地震などで人が亡くなるのは、結局建築のせいです。そこで、我々が何か責任をとって行動するのは当たり前のことだと思います。

最初は災害支援活動を普段の仕事と両立させていきたいと思いましたが、今はもう、その境があまりありません。富裕層の立派な家を作って喜んでいただくのも、仮設住宅を作ってそこに入居した方に喜んでいただくのも、自分の満足度とそこにかけるエネルギーは変わらないということに気がつきました。

災害支援活動を始めたのは、1994年のことです。ルワンダの悲惨な難民キャンプの写真を見て、ジュネーブの国連難民高等弁務官事務所に改善を求めに行きました。運良くコンサルタントとして雇っていただき、難民シェルターの開発を始めました。その翌年には、阪神淡路大地震が起こり、そこでも活動を行いました。

このように、悲惨な避難所の改善をずっと行っていますが、現在は間仕切りプロジェクトを中心に活動しています。私たちの間仕切りは一般の人のプライバシーを守るために有効ですが、行政は前例がないと言って断るので、一番の敵は行政です。それを説得して回るのが一番の仕事です。京都市とは防災協定を結んでいて、防災の日に、前例主義の役人の前で間仕切りの設置を実演しています。それによって、このような間仕切りは標準品だと認識してもらい、次に何か起こった際には簡単に実行できるように活動しています。地震の起こっていない今、世田谷や大分など日本全国のいろいろな市や県を回ってデモンストレーションと防災協定締結を進めています。

海外では、国や地域によって、災害が起こった後の処置が全く違います。ほとんどの国では、避難所はありません。避難所は日本独特のもので、イタリアでは被災後、人々は与えられた軍隊のテントにずっと住んでいました。このように、災害後の復興プロセスは全く違いますので、一つの手法では通用しません。その国のやり方に従った方法を取っています。

ポンピドゥー・センター・メッセ
(c)Didier Boy de la Tour



Special

Urban

Culture

Cuisine

— フランスとのお関係について教えてください。

もともとは、2004年にポンピドゥーセンター分館メッセのコンペに勝ち、パリに事務所を構えたのが始まりです。それからフランス語圏に仕事が増えました。1週間ごとに東京とパリを往復していて、いまではパリの事務所の方が人数が多いくらいです。ものを作ることにに関して、日本は本当に作りやすいです。なぜなら、日本はゼネコンの質が良く、クラフトマンシップがあります。ゼネコンは協力して良いものを作ろうという意識があります。フランスには全くそれがありません。フランスのゼネコンは最悪だと思っています。全く協調関係がありませんし、仕事を取った後は様々な理由をつけて、工期と値段のつり上げを図ります。それでいて、クラフトマンシップがありません。建築の現場は非常に大変です。仕事が始まった途端にフランスでは喧嘩をしないとはいけません。それは僕だけの意見ではなく、ジャン・ヌーヴェルもいつもそのような意見を言っています。

しかし、フランスの素晴らしいところは、施主が面白い設計や人物にチャンスを与えてくれるところです。例えば、日本では美術館の設計の実績がない人間に、ポンピドゥー・センター・メッセの設計の依頼は来ません。まず、コンペの資格すらないくらいです。しかし、フランスでは美術館の設計の経験がない僕にチャンスを与えました。また、イル・サガン島のコンペでも、音楽ホール設計はありませんでしたが、気に入ってくればチャンスを与えました。このようなことは、日本でもアメリカでもありません。アメリカも意外と保守的です。今、スイスでも大きな仕事を持ってたくさん使っていますが、こちらはより良いものをつくっていくための打ち合わせです。フランスの場合は、ゼネコンがデザインを変えてより安く簡単に作ろうとしますので、いかにデザインを守っていくかという戦いです。

デザインの質について、僕のデザインは特定のクラフトマンシップに頼っていません。もう少し大きな建築の見せ場や質があるので、そこさえ守れば細かい質の悪い部分があっても、建築として成り立ちます。あるいは、メッセでやったように、一番大事なところはドイツの会社に頼むなどします。ヨーロッパはEUの中で業者を自由に使えますので、そこがヨーロッパの素晴らしいところです。メッセの中国の帽子のような構造は、スイスのエンジニアが担当しています。

— フランスにデザインされたポンピドゥーセンター・メッセや紙の橋のプロジェクト、ポンピドゥーセンターの仮説スタジオなどについてお話をお聞かせください。

フランスは、作るの難しいですが、素晴らしいチャンスを与える国です。もちろん安全性はちゃんと確保していますが、紙の橋も、紙でつくることをOKしてくれています。ポンピドゥー・センターは、国立の美術館の上に仮設事務所を作らせてくれました。これは大変なことだと思います。

フランスの良さは、ものの良さや人の真実を見抜くところだと思います。だから、施主側は素晴らしいと思います。



— 富士山世界遺産センターやアスペンなど最新のプロジェクトのデザインについてお聞かせください。

デザインでは、個々の問題をやはりそれぞれデザインで解決しています。象徴的なデザインのものもありますが、そのようなデザインを施主が求めたらそうなります。例えば、今回のイル・サガン島でも、施主の方から、あそこがパリの西のゲートになるので、ゲートにふさわしいモニュメンタルなものを作ってほしいという要望がありました。そこで、変な形としてモニュメントを作るのはいやなので、巨大なソーラーパネルを船のセールのようにして、それが時間を追って太陽を追って動いていくというデザインにしました。

ポンピドゥー・センター・メッスの場合は、木造の屋根で、人がどこからでも入れるような開いた建築を作りたかったのです。

それに対してアスペンは、ダウンタウンに敷地があり、周りは四角いレンガ調の木造の建物に囲まれているため、中は多様ですが、周囲の環境に合わせた茶色い箱型の器を作りました。象徴性よりも、いかにコンテキストに溶け込むかを目指しました。

富士山世界遺産センターでは、日本最大のシンボルである富士山の目の前に世界遺産センターを作ります。コンペの時に見た他の案は、やはり富士山的な屋根を作っていました。しかし、富士山の前に富士山に似たようなものを作っても、かなうわけがありません。そこで、逆さ富士の逆をつくる水盤を作りました。シンボル性が求められていても、この場合はもっとすごいシンボルが横にあるので、それにいかに負けないか、それでいて一般の人へも分かりやすいよう考慮して設計しました。

— 最後に、若者にメッセージをお願いします。

どんな仕事をやる人も、とにかく旅をすることです。世界を回っているいろいろな文化に触れたり出会ったりするしかありません。

(聞き手：江口久美)

左上：
富士山世界遺産センター
(c)Shigeru Ban Architects
右上：
アスペン美術館
(c)Michael Moran
左下：
紙の仮説スタジオ
(c)Didier Boy de la Tour
右下：
女川町コンテナ多層仮設住宅
(c)Hiroyuki Hirai



筆者は昨年9月からパリでの留学を開始し、本年度はl'Institut d'Urbanisme de Paris (パリ都市計画学研究所) と l'Institut Français d'Urbanisme (フランス都市計画学研究所) が合併し、新設された l'École d'Urbanisme de Paris (パリ都市計画学校) で学んでいる。具体的には、「公共空間」に特化した専攻で学んでいる。公共空間というと、パリには公共空間を用いたイベントが多数見受けられる。今回はその中のひとつ、10月第一土曜日に開催される、Nuit Blanche (白夜祭) を紹介したい。

端的に Nuit Blanche の特徴を言うと、夜間 (20時~翌7時) に行われる現代アートの無料イベントである。毎年、違う場所で開催されるが、特徴的なのはその規模。本年も105箇所、動員は昨年の数字になるが、100万人以上の人出を集めた (Le Parisien 06/10/2014)。パリのみならず、世界30都市以上で開催されるまでになった。本年の京都では、開会の挨拶を来日中のフランス首相 Manuel Valles が務めたことは記憶に新しい。元々は、2002年に、パリ市文化担当助役 Christophe Girard の建言と、パリ市長 Bertrand Delanoë の肝入り (いずれも当時) で始められたもので、Girard に拠るところのその目的は、「アートを全ての人にとって親しみやすいものにする (rendre l'art accessible à tous)」「現代の創作によって都市空間を価値付ける (mettre en valeur l'espace urbain par la création moderne)」「共生のひとときを作り出す (créer un moment de convivialité)」の3点1)。都市空間の利用、積極的にアートに近づけるように、光、電子音楽、ダンスなどが比較的好まれる傾向がある。

パリ市役所横で貰った案内冊子を片手に、会場を出来る限り廻ってみた。冊子には、夜間の交通情報や、夜間営業のレストランまで書かれてあり、この日の夜歩きに欠かせないもの。地下鉄は関連路線が夜間営業をしており、夜間に限り無料で乗車できる。

パリ17区の Clichy Batigolles からパリ19区の La Villette 公園まで、5時間くらい歩きまわって一番印象に残ったのは、パリをぐるっと囲む廃線跡 (la petite ceinture) の会場。先ず、普段は閉ざされている (公的に) この空間に入れたことがテンションを高めてくれる。しかも、夜ということ、廃墟

パリ
PARIS

L'ECHANGE

都市

URBAIN

Nuit
Blanche

1) Christophe Girard, « Nuit Blanche, une manifestation qui s'inscrit dans une stratégie pour Paris », CAHIER ESPACE no 103 (Nuit urbain et tourisme), novembre 2009

パリ

Nuit Blanche

探検をしているような気持ちになる。所々に作品が展示されていて、廃線跡が一夜限りの美術館になっているような印象を受けた。長い廃線跡のうち、会場に該当したのは、Porte de Clichy から Porte de Clignancourt までで2km程の行程であった。

次に印象に残っているのは、La Villette 近くの Aubervilliers の会場。パリ域外になってしまう。といっても、順番に見ていって、気付いたら Aubervillier に入っていた印象。緑地の設置と、歩道の整備で、ハイウェイで分離されていた両地域を上手く連結させている。パリとパリ以外との分断の歴史を学んだものとしては感慨深い。運河の横の芝生に寝転び型の椅子が多数設置されていて、そこで横になって夜空を見る。月が徐々に動いていく。電子音楽が四方のスピーカーから客席を取り囲む。音楽に合わせて光の光線が交差する。野外の運河横の何も無いところ。それでも、闇のお陰で、何だか自分の居間に居るかのような落ち着いた気持ちになる。普段だと、夜間にここで横になることは怖くて出来ないだろう。それが、アートのお陰で、ゆっくりと夜の街の息遣いを感じることが出来る。porte de la villette まで夜の彷徨者を運ぶ連絡船が横を通り、一瞬、光と音の空間の雰囲気崩壊していく。時間は深夜1時。

満足した気持ちで、連絡船乗り場へと足を運ぶ道すがら、ガードマンに囲まれたある人物とすれ違った。パリ市長 Anne Hidalgo。元都市計画助役の市長ということもあるのか、今年の Nuit Blanche は、新しく整備された都市空間、もしくはこれから整備される都市空間を巡る側面が強かったように思われる (例えば、La petite Ceinture は市民の希望を受け、再整備されることが予定されていて、Aubervilliers へつながる歩行者空間は、まさに Nuit Blanche に合わせて完成したばかり)。ただ Nuit Blanche はそれだけではない。普段なかなか入りにくい空間に、アートの力で人々を誘うという側面もある (去年の la Bibliothèque Saint Geneviève の展示)。来年の10月第一土曜日、空間発見のため、パリを訪れてはいかがだろうか。

(文責・高田祐輔)



パリ留学中に見た日本

私は、Sciences Po Paris(パリ政治学院)に2014年8月から1年間の交換留学をしました。そこでは、フランス人学生用に開講されている日本語を学ぶ授業があり、日本に興味を持つフランス人と出会うことができました。彼らが日本に興味を持つ理由は多岐に渡ります。アニメや漫画といったサブカルチャーの影響、日本の幕末の歴史に興味がある、日本語の響きの美しさが好き…等々。日本に関心を持つ友人たちの話を聞くと、日本文化はフランス人にとって、親しみやすいものであると強く感じます。

日本から遠く離れた地、パリでの留学を通して体験したフランス人と日本人の異文化交流について、印象的な出来事を紹介していきます。

～ Cavalaire-sur-Mer 街で唯一の日本人～

留学先の大学で、出会ったフランス人の実家に招待してもらい、Cavalaire-sur-Mer という地中海に面する小さな街へ旅行に行きました。友人は、東京マラソンに出場する父に連れられ、中学生の頃、初めて日本を訪れました。その滞在をきっかけに日本のハイテク文化に魅了され、日本に興味を持ったそうです。スーパーで、一つひとつの野菜がビニールによって梱包されていること、時刻通りにやってくる常に清潔な電車で衝撃を受けたと教えてくれました。現在、法学を学ぶ傍ら、一生懸命日本語の勉強に励んでいます。

珍しく、日本人がこの街にいるということで、夕食時には近所に住む方々も来てくださり、にぎやかな晩餐を楽しみました。遠く離れた日本に興味津々な様子で、「日本人はパンやパスタを食べるのか?」「日本ではバターやチーズは全て輸入?」「寿司は毎日食べるの?」といった質問を受けました。純粋に日本を知りたいという好奇心からの質問でしたが、この地域では日本もまだ深くは知られていないみたいです。

友人は「日本には車があるのか、まで聞くつもり?」と、周りの質問に居心地が悪そうでしたが、私は日本人が多くいるパリから離れ、日本人が誰もいないこの街で、予想外の質問や疑問を聞いた良い経験ができたと感じています。

～ Journée japonaise au parc de Sceaux ～

4月半ば、パリ郊外に位置する Parc de Sceaux (ソー公園) に、大勢の日本人とフランス人が集まりました。RERのB線、少し都心から離れたこの公園に集う目的とは何でしょうか。それは「お花見」です。この公園は、パリで唯一たくさんの桜を見ることができ、お花見をする最適な場所として有名です。私もパリに留学している大学の友人たちとおつまみを準備し、宴会を開きました。公園には、日本語を専門的に学んでいる INALCO (フランス国立東洋言語文化研究所) の学生や、日仏の国際結婚カップルなど、日本に接点があるフランス人が多く集まっていました。

フランス人学生が行く和太鼓の演奏を聞きながら、あちこちで日本語とフランス語が入り交じる光景は愉快なものでした。芋の煮っ転がしやカボチャの煮物といった和食を味わいながら、スーパーで買った安いワインを飲み、日仏の食のコラボレーションを楽しみました。

近くの桜の木には、鯉のぼりが飾られていました。桜と鯉のぼりの組み合わせは日本では考えられないと思いつつも、これが「フランス式お花見」なのかと妙に納得してしまう雰囲気が公園にありました。パリに住む日本人にとってこのイベントは、故郷を思い出す素敵な一日になったのではないのでしょうか。

今後も日仏の友好関係を保つために、より日本に関心を抱いてもらうためには、個人レベルでの異文化理解と、お互いを魅了し合っていく関係が大切だと留学を通して学びました。留学で得た世界中の友人がいつの日か、日本に来てくれることを願って、その際にもフランス語でコミュニケーションが取れるよう、日本でこれからも一生懸命学んでいく所存です。(文責：佐藤鞠)



写真左：

南仏にある人口わずか7000人の小さな街。パカンスシーズンの夏にはその人口は何倍にも膨れ上がります。日本人どころか若者もほとんど見かけず、定年退職後に住みたい街として人気です。

写真右：

日本で一般的に見られるソメイヨシノではなく、開花すると鮮やかなピンク色になる八重桜のような桜でした。まだ開花前でしたが、既に大勢の人で賑わっていました。

めくるめく牡蠣の世界

パリの街角で「すべてここにあり (Tout y est)」と豪語するのは、牡蠣が食べられるバーの看板。かみつかんばかりの勢いで正面を向く魚もさることながら、その姿を惜しげもなく披露する大きな牡蠣も通行人の目を惹きつける。魚介類ならなんでも揃っていますという大仰な一文「すべてここにあり」は、しかし、ただの宣伝文句ではないかもしれない。

フランスの詩人レミ・ベロー (Rémy Belleau) は 16 世紀に、牡蠣を通して世界の美しさと多様性を謳った。天から朝露を受けた二枚の貝殻のくぼみに太陽の光が反射して輝き、白っぽく、青みがかった、あるいは赤みがかった玉虫色が生み出される。あたかも牡蠣には、天上の本質から生じるあらゆるものが流れ落ちるかのよう (de la céleste essence / Tout bien découle ça-bas)。

ベローのおよそ四百年後、20 世紀の詩人フランシス・ポンジュ (Francis Ponge) は牡蠣について「内側に見つかるのは世界すべてである (à l'intérieur l'on trouve tout un monde)」と語る。なるほど、牡蠣ひとつが壮大な世界を含むという着想を継承しているようだ。しかしポンジュは、牡蠣の内部を天が創り給うた美しい世界に見立てるだけで終わってはいない。「世界すべて」の後に「飲むものも食べるものも (à boire et à manger)」と付け加えている。この表現は「玉石混交だ (Il y a à boire et à manger)」という成句をもじっているのだが、牡蠣を食べるときに、汁を飲み身を食べる現実の仕草に見事に結びつく。

ポンジュの牡蠣は今にも食べようとする人間の手の中にあり、人間はナイフを持って頑固に閉じた貝の口を開こうとする。こじ開けられた牡蠣の内部では、「螺鈿の『天空』(文字通りの意味では『堅固な支え』)」のもと、上の空が下の空にたわんで、ひとつの沼を形づくるばかりである。ねばねばした緑がかかった小袋、それは匂いでも見た目でも、流れ寄せては引き返す。黒っぽいレースに縁取られて。」
牡蠣の身は緑の藻の混じるどろどろとした沼…螺鈿の光沢を天空に喩えたと思いきや、あまり食欲をそそらない牡蠣の描写である。だが、ベローの牡蠣が喚起する超越的な世界とは反対に、ポンジュの牡蠣は現実的で五感に訴えてくる。手に持った磯の香りがする物の触覚、嗅覚、視覚、そして身を口に運ぶときの音が味覚を喚起する。「上の空が下の空にたわんで (les cieux d'en-dessus s'affaissent sur les cieux d'en-dessous)」の部分は、ごらんのように s が多用されており「すすす～しゆるしゆる」と音を立てて読まざるを得ないのだ。

ベローの場合は自然界全体の象徴として、ポンジュの場合はあらゆる感覚を刺激する身近な事物として、牡蠣は「すべてここにあり」という言葉を添えられるにふさわしい存在である。かくして牡蠣バーの看板に書かれた宣伝文句は、フランス詩のエッセンスを含んだ、極めて文学的な言葉として現れてくる。

ちなみに日本の詩人では江戸時代後期に大窪詩仏が牡蠣を詩に謳っているが、その見方はどちらかといえばポンジュに近い(漢詩研究者マルグリット＝マリー・パルヴェレスコ早稲田大学教授の指摘)。牡蠣の身は水晶のように清らかに輝くと言いながら、調味料を入れて煮て、淡黄色の露の臺と緑色の海苔を添えて、と食べる気満々である。では言葉の牡蠣を口にするのはやめて、そろそろ現物を口にしたい。

(文責・綾部麻美)



編集 後記

L' Echange



江口久美 京大・人環
Kumi EGUCHI

やっと第四号が完成しました。今回は、昨年度ブリツカー賞を受賞された、建築の恩師でもあります坂茂先生へのインタビューを取行させていただきました。先生、お忙しい中、お時間をお取りいただき大変ありがとうございました。編集特派員も随時募集していますので、お気軽にご連絡ください。



高田祐輔 パリ都市計画学研究所
Yusuke TAKATA

フランスで感じるの、日仏お互いに政治のことをあまり知らないということです。今回の Nuit Blanche の投稿でも、政治的な面をもっと書きたかったのですが、力不足です。それはさておき、Nuit Blanche、パリの様々な表情を感じられるひとときです。この時期はホテルも満室になるので、興味のある方はお早めに企画してはいかがでしょうか。



綾部麻美 慶応義塾大学 仏文学
Mami AYABE

第一号掲載の日仏牡蛎交流の記事につづいて牡蛎のお話を書かせていただきました。詩に馴染みのない方もいらっしゃるかもしれませんが、身近にある物、食べ物や日用品をテーマにした作品は親しみやすくして実は奥深いところがあります。言葉遊びの世界でもあるので駄洒落修行にも最適です。



佐藤鞠 上智大学フランス語学科
Mari SATO

日本の和食も大好きですが、フランスのバゲットと美味しいチーズが恋しいです。卒業論文と就職活動で忙しくなりそうですが、どちらも一生懸命取り組んでいきます！

日仏工業技術会では新規会員を募集しています
趣旨にご賛同くださる方であれば、学生・社会人等を問わず歓迎です。

下記 HP の「正会員入会申込書」に、必要事項をご記入の上、本会事務局までお送りください。

http://www.sfjti.org/nyukai_set.html

お気軽に左記メールか電話でお問い合わせください。

sfjti 日仏工業技術会

日仏工業技術会は、創立者故菊池真一先生（東京大学名誉教授）が、1955年フランス大使館文化部（1969年独立して現在フランス大使館科学技術部）参事官（当時）C.d'Aumale氏の要請を受け、当時経団連会長の石川一郎氏に初代会長就任を願い発足いたしました。往時の日本では、フランスの「文化の国芸術の国」としての側面のみが強調され、科学技術、特に工業技術についての情報は殆どない時代で、今日の現状と比べると今昔の感があります。本会はこのような状態を打破すべく、フランスの工業技術、その基礎となる工業技術研究、工業技術の高等教育制度、社会基盤など、工業の背景にある文化、社会を理解しながら、より広範囲の工業技術をわが国の産業界、研究者、学生などに紹介することを設立以来一貫して努めています。

【日仏工業技術会事務局】
150-0013 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 日仏会館内
Tel 03-5424-1146 Fax 03-5424-1147
E-mail : sfjti@t3.rim.or.jp
HP: <http://www.sfjti.org/>



【交通アクセス】

JR 山手線：恵比寿駅東口下車 恵比寿ガーデンプレイス方面へ 徒歩 10分
営団地下鉄・日比谷線：恵比寿駅 1番出口 アトレ・JR 恵比寿駅東口を經由 徒歩 12分

日仏工業技術会への入会のご案内

日仏工業技術会は、駐日フランス大使館の協力を得て、日本とフランスの工業技術の紹介・普及、および両国の技術者の交流を促進することを目的として、1955年（昭和30年）に発足しました。両国と深い関係にある会社、研究所、内外の最新知識を求められる技術者、研究者、学生を会員とし、(公財)日仏会館傘下の学会の一つとして、様々な有益で最新の情報を会員の皆様に提供しています。

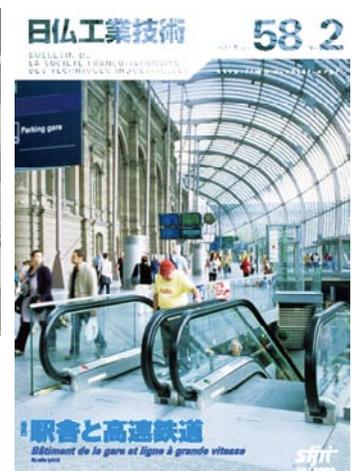
年二回配布する『日仏工業技術』は、日仏の工業技術に関する広範な知識を提供するだけでなく、「海からの贈り物」、「未来のプラスチック」、「iの時代、cの文化—情報通信に未来を探る—」、「色」、「からだの材料」、「原子力が繋ぐ日本とフランス」、「災害と国土」、「日仏の女性研究者たち」、「駅舎と高速鉄道」など、様々な切り口での特集を組み、底流に流れる文化の差異なども併せて紹介しています。昨年からは、若手研究者によるフリーペーパー『L'Echange』も発行し、旬なフランスの情報も提供しています。

また毎年、在日フランス商工会議所の会員とともに、金沢文庫、曹洞宗大本山総持寺、鶴岡八幡宮、江戸東京たてももの園などの日本の文化に触れながら、味の素(株)、三菱重工業(株)、(株)資生堂鎌倉工場&研究所、(独)日本原子力研究開発機構・東海村「J-PARCセンター」、住友電工(株)横浜製作所、(財)鉄道総合技術研究所などの日本の誇る先端技術を見学しています。

さらに、日仏フォーラムとして、『日仏都市会議』、『日仏鉄道技術シンポジウム』、『日仏情報通信フォーラム』、『日仏環境会議2008—都市生活と環境—』、『日仏原子力フォーラム—過去・現在・未来—』、『日仏水フォーラム』を開催し、日仏、日欧の情報の懸け橋となって活動を展開しています。

皆様に是非、ご入会いただき、ご一緒に活動できますよう、よろしくお願い申し上げます。

日仏工業技術会会長 高橋 裕



写真左よりシンポジウムの風景、資生堂研究所見学の際の集合写真、会誌の表紙例

入会申込書

入会申込日： 年 月 日

貴会の趣旨に賛同し、正会員または学生会員として入会を申し込みます。

会員種別	正会員 (5 千円/年) 学生会員 (2 千円/年) (○で囲んでください) (いずれも入会金は無)
氏名	ふりがな： 漢字表記： 印 英語表記：
生年月日	西暦 年 月 日生
勤務先・在学先 (部署・学科まで)	
勤務先住所	〒 TEL: FAX: E-mail:
自宅住所	〒 TEL: FAX: E-mail:
会誌送付先	勤務先・在学先 自宅 (○で囲んでください)
学歴	大学 学部 学科 年卒業・見込 大学 研究科 専攻 修士課程 年修了・在籍中 博士課程 年修了・在籍中
専門	
通信欄	

〒150-0013 東京都渋谷区恵比寿 3-9-25 日仏会館内 日仏工業技術会
TEL: 03-5424-1146 FAX: 03-5424-1147 e-mail: sfjti@t3.rim.or.jp
振込先: みずほ銀行 恵比寿支店 恵比寿ガーデン出張所 普通 1349506
三井住友銀行 神田支店 普通 0952122